

## ギターと私(7)ーサラリーマン時代②

「サラリーマン時代②」と記したが、私は、サラリーマンを 9 年間しかやっていない。最初にお世話になった会社が 3 年間、次に学習塾の講師が 6 年間である。そして、31 歳の時に「真詮(しんせん)塾」を立ち上げて独立した。よって、サラリーマン時代のことは、前回までで書き尽くしたことになる。実際、1983 年からの数年間はクラシックギターから遠ざかっており、1987 年に故後藤則之先生が主宰するギター教室へ入会した時は、ちょっとした「浦島太郎」状態であった。この期間に世に出てきて話題になったギタリストに E. フィスクがいるが、未だにその名前になじめない。

さて、この期間では、故後藤先生に師事してから初めて参加した、先生のご自宅で開催された発表会のことが、深く心に残っている。私はカルレパー口の「南米風前奏曲第 1 番」と「第 5 番」を弾いたが、そんなことより、久しぶりに味わうギター教室の「発表会」という雰囲気に関心から浸った。そして、「自分はここにいればいいのだ」という確信を持った。それまでの 4、5 年間遠ざかっていたギター教室がもつ雰囲気に、強烈なノスタルジーを感じたのである。

この確信は、いまだに胸中の奥深いところにある。というより、この確信に導かれて、私はその後のギター人生を歩んできたのだと、今になってわかる。野村先生の教室を退会してから約 5 年の歳月が経過していたわけだが、普通これだけの間遠ざかってしまえば、ギターとの縁が切れてしまっても不思議はないだろう。それが、1987 年のある日の夜中、突然ギターが弾きたくなったのであった。しばらくケースから出してもいなかったギターを取り出し、「マールボロ—の主題による変奏曲」(ソル)他を弾いた夜のことは、生涯忘れない。それで、もう一度先生に就いて勉強しようと思い立ったのである。私はすでに 34 歳になっており、2 児の父親になっていた。

さて、後藤ギター教室に入会した翌年(1989 年)から、コンクールに再挑戦しだすことになるのだが、この年は、昭和から平成に年号が変わった年でもあった。結果的に言えば、1991 年(平成 3 年)、再開後 3 度目の挑戦で、「第 16 回ギター音楽大賞」(日本ギタリスト会議主催)において奨励賞(第 3 位)を頂いた。第 1 位は該当者なし、第 2 位が 2 人受賞、第 3 位が私という結果であった。

コンクール当日(5 月 5 日)、約 20 人が参加した予選が終わり、客席で本選出場者の発表を聞いたわけだが、自分の名前を呼ばれた時の喜びは、いまだに胸中にある。これは、奥深いところではなく、まるで昨日聞いたかのように鮮明に残っている。思えば、コンクールに挑戦しだしてから 10 年以上の歳月が経過していた。

この時のコンクールの本選に残ったのが 7 人、そのうち、最年少が 14 歳だから、中学生の女性というより女の子(この女性は、現在もプロギタリストとして活動していらっしゃる)、最年長は言うまでもなく、この私であった。クラシックギター界において、国内のコンクールに挑戦する世代は、大まかに言って、10 代半ばから 20 代半ばまでぐらいであろう。その中であって、37 歳だった私は、異色中の異色だったと言える。実は、長年心ひそかに思っていることだが、37 歳という年齢は、ギターコンクールの本選に残った方々の中で、最年長ではないだろうか？ギネスもののだとは言わないが、それなりに値打ちのあることだと自負している。

さて、有名人でもない私がギター歴を書き綴っていても、興味を持って読んでいただける方はごく少数であろうから、閑話休題ではないが、今回は、今回書いた、コンクール最年長入賞の要因なども絡めながら、「レッスンの効果的な受け方」というような内容で書いてみようと考えている。

(2020.4.14 記)